



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

## 札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	3 歳児における情動表出の制御
Author(s)	高橋, 義信
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 1 号: 59-62
Issue Date	1997 年
DOI	10.15114/bshs.1.59
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6601">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6601</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192159.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

## 3 歳児における情動表出の制御

高 橋 義 信

札幌医科大学保健医療学部一般教育科

### 要 旨

3 歳児を対象に否定的な情動表出の自発的な制御についての実験が行われた。Cole の「失望手続き」に幾つかの改良を加えた手続きが使われた。一連の課題を行った後、賞品を与えるといって、5 つの賞品を提示し、その好ましさに順位付けをさせた。そして第 5 位のものを与えた。その時 3 歳児がどのように反応したかが分析された。結果は、3 歳児の約半数が否定的な情動表出を何らかの形で制御した。またはっきりとした性差が見いだされ、女兒は男児よりもその点に関して優れていた。3 歳という年齢が情動表出の制御が始まりだした年齢と言うことが示唆された。

<索引用語> 情動表出、制御、幼児、性差

### 目 的

情動が新生児期から、親子関係の形成と維持に中心的役割を果たしていることは、愛着研究などが明らかにしてきたところである。しかし、情動発達研究の多くが乳児を対象にしたもので、乳児期以降の研究はきわめて少ない。

親子関係がその生活の大半を占めてきた乳児期と比べて、幼児期ではその社会生活は飛躍的に拡大するのが普通である。そのため情動の果たす役割も一層複雑かつ重要になる。乳児を対象にした研究のように、どのような情動がいつ頃発達し、どのような機能を持つかといった問題設定だけでは、幼児期に見られる情動の発達の重要な側面をとらえることはできないであろう。

幼児期になれば、乳児のように、自分が不快な状態にあることを、そのまま直接的に周りの人間に表出するだけでは不適切な行動となる。なぜなら不快なことを表出することにより、周りの人間を不快にさせ、それによって友好的な関係が悪化する場合があるからである。状況によって、不快であることを隠蔽するというのが幼児期には求められてくるのである。このように幼児期の重要な発達課題として、情動表出を適切に制御するということがあげられるだろう。

今までの研究は、児童期中期にならないと情動表出を制御することが困難であることを示している<sup>1)</sup>。しかし、研究の数は少なく、その結果も明確ではない。そのなかで Cole の研究は注目すべきものである<sup>2)</sup>。

Cole は Saarni<sup>3)</sup> が考案した手続きを改良して、子どもの自発的な情動表出の制御に関する実験を行った。それは子どもに 10 個の賞品を見せ、好きなものから順番につけさせる。その後簡単な課題を行い、それに対して賞品をあげることを告げ、第 1 位の賞品をあげる。次にまた同様の課題を行い、賞品をあげるのだが、今度は第 10 位のすなわち一番好ましくないものを賞品としてあげるのである。期待はずれの賞品を与えることで子どもを失望させ、その際にどのように反応するかを見るのである。

この手続きは、人工的に表情を作らせてみる従来の手続きに比べて、自然な状況で自発的に情動表出させるという点で優れており、子どもを対象にした実験にありがちな子どもの能力を過小評価することをさける点でも好ましいものである。

ここで報告する研究では、この「失望手続き」を使い、否定的な情動を隠蔽することを求められる状況において、幼児が自発的に示す情動表出行動を明らかにすることを目的とする。しかし、この研究では幾つかの点で、Cole の手続きに変更を加えている。

一つは、好ましい賞品を与えた後、失望させる賞品を与えるのではなく、はじめから失望させる賞品を与えるようにした点である。この変更はCarry over効果を防ぐためである。はじめに好ましい商品をもたらしたために、それで大いに満足し、次のものが失望させる商品であるにも関わらず、ほとんど失望を表出しないという可能性があるからである。もしそうならColeの手続は子どもの能力を過大評価することになるのである。

二つめは、この課題を行う前に約1時間ほど別の課題を行ったことである。このことは子どもに自分は十分協力したのだから、そのことに対する報酬があつて当然であるという強い期待を引き出す効果があるだろう。そのためこの研究での被験者は簡単な課題しか行わなかったColeの被験者よりも強い失望を感じることになるだろう。

三つめは、賞品の数を10から5に減らしたことである。これは3歳児にとって10個のものを順位付けするのが困難で、5という数が順位付けするという手続きにとってより適正なものだからである。

最後に、四つめとしては、対象を3歳児に限定したことである。3歳は幼児期の始まりであり、その前後に質的な発達変化が生じると考えられ、現在発達研究の中で最も注目されている年齢である。Coleは研究2で、3歳の女兒のみを対象にした実験を行い、女兒に限ってではあるが、3歳時でもある程度情動表出の制御が可能であることを報告している。この研究では3歳児の全体の能力を調べるため男児も加えた。

## 方 法

### 被験者

札幌市内に住む3歳児、36名（平均月齢＝43.22ヶ月、範囲＝42-47ヶ月）で、男児19名（平均月齢＝43.42ヶ月、範囲＝42-47ヶ月）、女児17名（平均月齢＝43.00ヶ月、範囲＝42-45ヶ月）。被験者はすべて知的、情動的に問題のない健常児である。

### 手続き

子どもとその母親は個別に北海道大学教育学部付属乳幼児臨床発達センターの実験室に来てもらい、女性の大学院生によって実験が行われた。全ての母親は実験開始に先立って、実験の手順と謝金について説明を受け、実験に参加することに同意をした。

被験者と母親は約1時間かけて情動や気質に関する課題を行い、その一連の実験の最後の課題として、ここで報告される実験が行われた。

実験者は5つの賞品（ミニカー、キティーちゃんのおしゃれセット、赤ちゃん向けの人形、シール、ガム）が入った箱を手にもって実験室に入り、テーブルをはさんでいすに座っている子どもと向き合う形で座る。その後、「今

日は本当にがんばってくれました。疲れたかな。」と尋ねる。子どもが回答してから、「そう。本当にいい子だったのでプレゼントをあげようかなと思うのだけれど、これを見てください。」といい、テーブルの上に5つの賞品をランダムな順序で並べる。「この中で一番ほしいのはどれ。」と尋ね、子どもに選ばせる。選んだものを取り除き、「この中で、一番ほしいのはどれかな。」と2番目以降を選ばせ、選んだ順にテーブルに並べておく。

子どもが選び終わった後、「どれをあげようかな。」といい、少し間をおいてから、「これにしましょう。」といって、最後に選んだ賞品、すなわち一番ほしくない賞品を子どもに差し出す。実験者は子どもの反応がどうか、あるいは30秒経過するまでそのままの状態を保つ。その間、実験者は子どもの目を見るが、表情は中立的なものにする。子どもが何らかの反応をしたら、「やっぱりこれにしようね。」と言って、第1位の賞品をあげる。

### 得点化の手続き

一番ほしくないものをもたらした時、各被験者がどの程度否定的な情動を隠蔽したかを次のような基準で得点化した。1－差し出された賞品を受け取らないで、他の賞品を強く要求する。はっきりとした否定的な情動を表出する。2－差し出された賞品を受け取らない、あるいはいったん受け取るがすぐに戻す。表情は中立的で、はっきりとした否定的な表情は表出しない。3－差し出された賞品を受け取るが、表情は中立的。あるいは受け取らないが、少なくとも部分的な微笑を示す。4－差し出された賞品を受け取る。部分的な微笑を示す。5－差し出された賞品を受け取る。完全な微笑を示す。この得点化の対象になった反応は、賞品が差し出されてから最初に示した反応である。

## 結 果

一人の女児が賞品の順序づけができなかったため分析の対象から除外された。残りの35人の被験者がもっとも好ましくない賞品を差し出されたときどのように反応したかは表1にまとめた。得点化は2人の人間によって独立に行われ、その一致率は91%であった。

全被験者の得点の平均値は2.37、標準偏差は1.17であった。失望や不満を何らかの形で隠蔽しようとしたことを示す3以上の得点のものは約50%で、全く隠蔽せずあからさまに示したことを示す2以下の得点のものが約50%ということが、表1から読みとれる。3以上の得点のものの多くは、与えられた賞品を受け取り、それで遊ぶそぶりを示した。中には、一度受け取った後で、「これ、お母さんだめだと言っている。」とか、「これお家にいっぱいある。」などと言って別の賞品に取り替えてもらえるよう一種の“交渉”を試みたものがいた。得点が2以下のものの多くは、与えられた賞品を受け取らず実

験者に押しつけ、「これいやだ。」などと繰り返し、強く一番好ましい賞品を要求した。なかには全部ほしいと主張するものもいた。

表1 反応得点分布 (人)

	1	2	3	4	5
男 児	8	6	3	1	1
女 児	3	1	8	4	0
全 体	11	7	11	5	1

n=35

表2 男女別の反応得点の平均値と標準偏差

	人数	平均値	標準偏差
男 児	19	2.00	1.16
女 児	16	2.81	1.05

t=2.16 P<.05

表1からは性差があることがうかがわれるが、t検定を行ったところ有意な性差があることが示された(t=2.16, df=33, p<.05)。男女別の結果は表2にまとめられている。

## 考 察

この研究の結果は、3歳児でも、不満や失望といった否定的な情動を自発的に制御できることを示した。この研究での手続きはColeの手続きよりもより過酷なものであった。子どもたちは約1時間ほど様々な課題の遂行を求められたのである。そのあと課題遂行のごほうびを与えるということでここで報告された実験が行われたのである。子どもたちは当然、自分がもっともほしいとしたものをもらえると期待したであろう。そのことを考えると、3歳児が否定的な情動を示さず隠蔽したというのは驚きである。しかし、不満や失望を隠蔽できたのは被験者の約半数であった。そのことを考慮に入れば3歳という年齢は、情動表出をよりその文化の中で受け入れられる形で表出するようになり始めた年齢といえそうである。

一方、これまでの研究は、人間というものは、本当は悲しいが見かけはうれしそうにする、あるいは本当はうれしいが見かけはうれしくないようにすることがあるということ、つまり情動に関して“本当”と“見かけ”が異なることがあると言うことを理解できるようになるのは6歳頃であることを示している<sup>4,5)</sup>。このこととこの研究の結果をあわせれば、情動の自発的な隠蔽という行動がまず初めにできるようになり、その後数年の時間かけて、そのような行動に対する知的な理解が進むのであるといえるだろう。これは、ある行動がまず出現し数年後にその行動に対する理解が成立するという、一般的な

発達傾向と一致するものといえるだろう。

また、はっきりとした性差が見られた。女兒は男児に比べて不満や失望を示すことが少なく、うまく情動を隠蔽できた。これは先行研究と一致する結果である。なぜ女兒は男児よりも情動を隠蔽することに関して優れているのだろうか。一つの可能性としては、社会化の違いがある。親は男児よりも女兒に対して、より礼儀正しいことを要求する傾向がある。そのため女兒は早い段階から他者の感情を損ねるような社会的に承認されない行動をさける傾向を身につけるのかもしれない。

Lewisたち<sup>6)</sup>は、3歳児を被験者に次のような実験をしている。あるおもちゃを示し、実験者が戻ってくるまでそのおもちゃをのぞいてはいけないと言って部屋を出る。その間の子ども様子はワンウェイミラー越しに観察される。子どもが指示に逆らってのぞいてしまう、あるいは5分経過すると部屋に戻り、のぞいたかどうかを尋ねるのである。のぞいてしまう率は男女ほぼ同じであったが、女兒の方が男児よりもより多く嘘をつくという結果であった。Lewisたちは、これは女兒が男児よりも社会的承認を得ることにより関心が強いせいであるかもしれないとし、社会化の過程が男女の間で違うことがこのような課題での性差を生み出している可能性に言及している。

このような性差が存在することは、この研究でも確認されたが、その原因を明らかにするためには、少なくとも3歳までの社会化の過程に関する資料が欠かせないだろう。

## 文 献

- 1) DePaulo B, Jordan A : Development of nonverbal behavior in children. New York, Springer-Verlag, 1982, p151-181
- 2) Cole P M : Children's spontaneous control of facial expression. Child Development 57: 1309-1321, 1986
- 3) Sarrani C : Observing children's use of display rules: Age and sex difference. Child Development 55: 1504-1513. 1984
- 4) Harris P L, Donnelly K, Guz GR et al : Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. Child Development 57 : 895-909, 1986
- 5) Joshi M S, Maclean M : Indian and English children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. Child Development 65: 1372-1384, 1996
- 6) Lewis M, Stanger C, Sullivan M W : Deception in 3-year-olds. Developmental Psychology 25:439-443, 1989

## Control of Emotional Expressions in 3-year-olds

Yoshinobu TAKAHASHI

Department of Liberal Arts and Sciences, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

### Abstract

Spontaneous control of negative emotional expression was examined in three-year-olds. The disappointing procedure invented by Cole was utilized, but some modifications were added. After a series of tasks, the examiner announced the child would get a prize. Children were shown 5 potential prizes. Each child rank-ordered the prizes by picking the best prize, the second best, and so on until all 5 were ranked. The fifth-ranked prize was given to the child. The responses of the child when given the disappointing prize were analyzed. The results indicated that half of children controlled negative emotional expression and that the girls did so more than the boys. Three-year-olds may have begun to learn how to control their emotional expressions.

Key words : Emotional expression, Control, Child, Sex difference